

大山学講座特別編

『赤松荒神祭をたずねて』開催!

3月6日(日)、県指定無形民俗文化財『赤松の荒神祭』を見学する大山学講座『赤松荒神祭をたずねて』を行いました。当初の定員を大きく上回る約50人の参加がありました。



▲荒神祭について学ぶ

午前中は、大山農村環境改善センターで、鳥取県教育委員会事務局文化財課の原島知子文化財主事(民俗文化財担当)に赤松荒神祭の祭りの流れや県西部の荒神祭と比較した赤松の特徴などについて講演をいただきました。

午後には、赤松集落に移動して、荒神祭の祈願祭、集落内での大蛇巡行、大蛇を日吉神社へ奉納するまでの様子を見学しました。

講演で解説を受けた後での見学とあつて、参加者は「祭りについての理解が深まった」と喜んでおられました。参加者の中には、実行委員会から担ぎ手を募る呼びかけを受けて赤松の方々と一緒に大蛇を担がれた方もあり、見学だけでなく実際に行事に参加することもできました。

当日はあいにくの雨模様ではありましたが、外を練り歩



▲大蛇巡行を見学

く大蛇巡行の際には小雨となりました。赤松荒神祭の起源は大干ばつに見舞われた際の氏神様のご神託に基づくものですので、ある意味では恵みの慈雨が降り注いだのかもかもしれません。

県指定後初めての荒神祭であつた今回の祭りには、大山学講座の参加者以外にもたくさんの方が見学されていました。中には県外からの見学者もあり、大変にぎやかな祭りとなりました。

(人権・社会教育課文化財室)

まちなかのたから(13) 文化財室通信

大神山神社奥宮の巻

近世以前の神仏習合の大山寺で、山陰山陽に広まった大山信仰の中心をなしていたのが、境内最奥に位置する本社であつた大智明権現社です。

大智明権現は、古来より大山に住まうと信仰されてきた神が、大山に地藏信仰が伝わった後に、地藏菩薩が神の姿で現れた団体として信仰されるようになったものと考えられています。

大智明権現像を安置した建物は古くは神殿や御宝殿と呼ばれ、承安元年(1171)の火災で焼失して以降、幾度も災害に遭い、そのたびに再建されてきました。寛政8(1796)年には本坊西楽院など30余坊が被災した大火災で焼失し、清光院恵覚らが勧進し、京都の大工棟梁・三輪平太によって再建に着

手されました。完成したのは今から約210年前の文化2年(1805)です。

明治維新後に神仏分離と廃仏毀釈が進む中、明治8(1875)年に大山寺号が廃絶となつて、大智明権現社から、権現像などの仏体や仏具を取り除いて、大神山神社の奥宮とすることが定められ、現在に至ります。

現存する建物は、拜殿と本殿を幣殿で結び、拜殿の左右に長い翼廊が付く独特の形態をしており、屋根は指定時には檜皮葺きでしたが、修理事業でもとの柿葺きに復元されました。幣殿は円柱などに白檀塗りが採用され、格天井には華麗な花鳥・人物・動物が描かれています。

江戸時代後期を代表する権現造の荘厳な神社建築として知られ、末下山神社と合せて昭和63年12月に国の重要文化財に指定されました。

(人権・社会教育課文化財室)

▶重要文化財 大神山神社奥宮

